

Title	司馬遷の歴史叙述
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 13 p.131-p.151
Issue Date	1995-09-29
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79677
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

司馬遷の歴史叙述

勝 藤 猛

Si-ma Qian's Historiography

Takeshi KATSUFUJI

The history of the Far Eastern Asia before the modern age may be defined as a history of interactions between pastoral or nomadic peoples in the north and agricultural and urbanized China in the south.

Si-ma Qian (145?-86? BC) was a court-historiographer under the Emperor Wu-di of the Han Dynasty. When he expressed at a court meeting his sympathy for Li Ling, a Chinese soldier defeated at a battle with the warrior-horsemen Xung-nu, or the Huns, he was put in prison and was made eunuch.

Recovering from a desperate mood, he resumed to write a history of China. It was a kind of compensation for the physical defect. We see from his life how weak and miserable an intellectual is in the face of a sovereign. His *Records of History*, however, as a model of Chinese historiography, has been loved and respected for thousands of years.

I 君主と文人——武帝と司馬遷

筆者はさきに「イル・ハン朝の諸問題」(『龍谷史壇』103, 104, 1994年)において、モンゴル人君主の下で宰相——出身はタジク人・ユダヤ人——の地位がいかに不安定であったかを論じた。即ち同朝末期のアブー・サイード・ハンの治世に死亡したタージュ・アル・ディーン・アリー・シャーは同朝10人目の宰相で、天寿を全うしたが、それ以前の9人はみな死刑になっている。

目を東アジアの西暦紀元前に移すと、一大盛期とされる漢の武帝の世には、12人の丞相が任ぜら

れ、そのうち、無事に勤め上げた者3、法に触れて免職となった者3、犯罪が発覚して自殺した者3、死刑に処せられた者3、という有様である。貝塚茂樹『史記——中国古代の人びと——』（中公新書）。武帝はそのほか、ふたり目の皇后＝衛子夫と、その子で皇太子＝劉戾を死に追いやっている。

武帝時代の記録で今に残って読まれている司馬遷「任少卿に報ずる書」は、君主とその下にいる文人の関係を、極端なまでに鮮明に描いたもので、他の地域、例えばイル・ハン朝の宰相・文人＝ジュワイニー、ラシードらと比較する一基準となるだろう。司馬遷は前98年、李陵を弁護したことで帝の怒りを買ひ、男性の生殖器を切断する刑に処せられた。しかし父＝司馬談を継いで太史令の地位にあった。記録や天文を扱うこの職は、西アジアにおける宰相と同じく、特定の家系に伝来のものであった。前93年、当時、益州刺史（今の四川省の監督官）であった任安（字、少卿）から、賢を推し士を進めるよう、はっきり言えば、自分を皇帝に推薦してより高い身分に取り立てるよう、依頼の手紙を受け取っていた。しかし最高に屈辱的な刑罰を受けた司馬遷は、武帝にこのことを申し出る勇気なく、気になりながら返事を遅らせていた。ところが任安はその後、首都駐屯軍参謀という地位についていた時、前91年、武帝と戾太子との対立事件が起こり、任安が皇帝支持の明確な態度を取らなかったという理由で、彼は帝によって死刑を宣告され、いつ執行があるかわからないという時期になり、遷はようやく筆を取り、細長い木簡に返事を書き始めた。なお執筆を前93年とする説もある。この手紙は、漢書司馬遷伝と文選巻41にあり、両者に僅かな相違がある。

参考文献

武田泰淳著『司馬遷——史記の世界——』、ここでは創元文庫。

バートン・ワトソン著、今鷹真訳『司馬遷』、筑摩書房、83～95頁。Watson, Burton, *Ssu-ma Ch'ien, Grand Historian of China*, New York, 1968.

中島敦『李陵・山月記』（角川文庫）所収参考文、都留春雄「任少卿に報ずる書」（文選からの訓読文）

小川環樹はか訳『史記列伝』1～5、同『史記世家』上中下、岩波文庫。

小竹武夫訳『漢書』、筑摩書房。

本田清訳『漢書・後漢書・三国志列伝選』、一海知義訳『漢魏六朝唐宋散文選』、平凡社、中国古典文学大系。

網裕次訳『文選』、明德出版社、中国古典新書。

任少卿さま

以前にはお手紙を頂戴し、恐縮に存じます。そこにおいて、人間の交際にあってはよく考え、賢なるもの・士¹⁾たるものを推薦するようと、お教え下さいました。まじめで一途なお気持ちはよくわかりますが、私があなたを見習うことなく、世間の俗物と同じことをしていると、あなたは私をおとがめようです。しかしながら私は愚かな人間とはいえ、長者の遺風をかすかに聞いたことがあります²⁾。

1) 士、古代中国の身分として、天子・諸侯・卿・大夫・士・庶人があった。士は支配層の最下位。ここでは

価値を含み、立派な成人男子の意味。

- 2) 尊敬・謙譲の語が多い。「辱賜書」書をたまわることにかたじけのうす、手紙を頂く。「教以…」教うるに…をもってす、…して下さる。相手の表現に対する敬語。ペルシア語なら farmûdan “命ずる”。「僕」自分に対する謙譲語、ペルシア語の bande^a “召使い”に当たる。「側聞…」ほのかに聞けり、“ちゃんと聞いた”と言いたいが、遠慮した表現。「教以…推賢進士為務」教うるに、賢を推し、士を進むるを務めと為すを以てす。この手紙の末尾にもう一度出る。

自分のことを考えてみますと、私は体に欠陥をもつ者となり、けがらわしい境遇にいます。何か行えばとがめられ、益あれかしとしたことが損になります。したがって独りふさぎこんで、話し相手もありません。諺に言います「何を為してもわかってもらえない、何を言っても聞いてもらえない」と¹⁾。琴の名手伯牙はよい聞き役鍾子期が死ぬと、再び琴を弾きませんでした²⁾。なぜなら、「士は自分を知ってくれる人のために働き、女は自分を喜んでくれる者のために化粧する」といいます³⁾。私はといえば、肉体が欠けています。たとえ私の才能が随侯の珠・和氏の璧⁴⁾のように貴重で、行いが許由・伯夷⁵⁾のように無欲であったとしても、結局は栄誉とみなされず、嘲笑的となり、自らをけがすのが落ちです。

- 1) 「誰為之、孰令聽之」たれのためにかこれをなし、たれにかこれをきかしめん。
- 2) 春秋時代の人、よい演奏者といえ鑑賞者の組み合わせ、列子、湯問。また蒙求「伯牙絶絃」
- 3) 史記、刺客列伝、予譲の条「士為知己者死」の「死」が、ここでは「用」「はたらく」となる。
- 4) 随国の近く、濮水で取れた珠と、楚の山中で得た璧。貴重なもの、人間の才徳のすぐれたことの譬え。後者「カシのへキ」は趙国の所有となり、これを秦が取り上げようとしたが、藺相如が確保したことから“完璧”の諺が生まれた。
- 5) 許由の人格を見て、堯が「九州長」（全国の統治者）としようとしたが、彼はけがらわしいことを聞いたと、潁水のほとりて耳を洗った、といわれる。伯夷・叔齊兄弟は、周の武王がその父文王の喪中でありながら、君たる殷を武力で討とうとするのに反対し、天下を取った周の米を食わず、首陽山で野草を食べていたが、飢え死にしたという。いずれも清廉の典型である。

お手紙に早く返事すべきでしたが、ちょうど天子にお供して東に行って帰ったり、また雑多な公務に追われて、お目にかかる暇がなく、あわただしくして、私の気持ちを述べることもできませんでした。今、少卿さまは、思いもかけぬ罪に問われ、月日が過ぎて季冬に近づいています¹⁾。私は天子に従って雍でのお祭り²⁾に行かねばなりません。あなたの身に突然、避けることができない死が起こることを私は恐れ、私の心の中を一生あなたにわかってもらえないのでは、この世を永遠に去るあなたとしても、恨み尽きないことでしょう。くだらないながら私の思いを述べましょう。長い間返事しなかったことをどうかお許し下さい。

- 1) 「涉旬月、迫季冬」「旬月」は“1か月”“10か月”の意味があるが、月日が経過すると取る。「季冬」は孟・仲冬の後の冬の最後の月。死刑執行は春には行わないから、任安に対する処刑が迫ると司馬遷は思い、返事を急いだ。
- 2) 雍（今の陝西省鳳翔県の南）は、土地が高く、神の居るべき所なので、昔から好時・武時といった祭壇が設けられ、関中西部の祭祠の中心であった。漢は高祖以来、ここでの天地の祭りを重視していた。狩野直

禎・西脇常記訳注『漢書郊祀志』（東洋文庫）解説。

わたしはこんなことを聞いたことがあります。（個条書きにする）

- | | | |
|---------------|-------------|------------------------|
| 一 身を修めることは | 智のあかしである | 修身者、智之府也 |
| 二 施しを愛することは | 仁のはじめである | 愛施者、仁之端也 |
| 三 与えられるものを取るの | 義のしるしである | 取予者、義之符也 ¹⁾ |
| 四 辱めを恥とすることは | 勇のさだめである | 恥辱者、勇之決也 |
| 五 名を立てることは | 行のきわみである | 立名者、行之極也 |
| 1 禍いは | 利を欲することより | なさないものはない |
| 2 悲しみは | 心を傷つけるより | いたましいものはない |
| 3 行いは | 先祖を恥ずかしめるより | けがらわしいものはない |
| 4 恥は | 宮刑より | 大きいものはない |

1) 似た表現が後にも出る。

宮刑を受けた者を人並みに扱わないのは、今の世だけでなく、昔からそうです。例えば君主と宦官の関係が批判された例の1として、春秋時代、衛の靈公は雍渠と一緒に馬車に乗ったので、孔子はそれを恥として、衛を去って陳へ行った。その2、衛の人、商鞅は、秦へ行き、景監のとりなしで孝公に会い、就職に成功し、改革政策を実施したが、賢人、趙良から強引なやりかたを批判された。その3、漢の文帝は趙談が星占いが上手なので気に入って、車にも同乗させていたのを、中郎将（侍従長）＝袁盎（字、絲）が帝に忠告したことなどです。

これを表示すれば下のとおり：

	君主	宦官	批判者	史記の関連箇所
1	衛、靈公	雍渠	孔子	孔子世家
2	秦、孝公と商鞅	景監	趙良	商君列伝
3	漢、文帝	趙談*	袁盎	袁盎列伝

*司馬遷の父＝談と名が同じなので「同子」と表記。

このように昔から、宦官を相手にすることを恥としてきました。平均的な才能の人でも宦官や小姓に関することは気持ちが傷つけられるものです。まして意気盛んな人は憤慨します。現在、朝廷に人材が乏しいといっても、私のような刑罰を受けた身が天下の豪傑を推薦する必要はありますまい¹⁾。

1) 如今朝雖乏人，奈何令刀鋸之余，薦天下豪俊哉。これと似た文は：今漢雖乏人，陛下独奈何与刀鋸余人載。

（袁盎列伝）

私は父が残した仕事のおかげで天子のそばに仕えること、20余年になります。自分で考えてみますに、私には次の四つの能力のどれもありません。

上に対して、忠を収め信を致し、奇策・才力の誉れがあって、自然と天子と結びつく。

次には、朝廷の政治で、落ちたものを拾い、欠けたものを補い、また賢者を招き能者を進め、岩穴に隠れた人を世に出す。[人間関係に配慮するのは君主の特権で、臣下のすることでない、と司馬遷は、衛將軍・驃騎列伝の太史公曰で、衛青・霍去病をよい例、竇嬰・田蚡を悪い例として述べている]

外では、軍隊の列に加わって城を攻め・野で戦い、敵将を斬り、敵の旗を奪う。

下では、毎日苦勞して勤め、尊い官職・厚い俸禄を受け、親戚・友人から尊敬される。

私はこの四つのどれも達成できませんから、人と調子を合わせて気にいられようとしても何の効果もありません。私の有様はこのようなものです。ただ私も以前は太史令の職により下大夫の一員で、政府の会議の末席に坐っていました。その時でも国法を引き思慮を尽くすべきなのに、それをせず、今は不具の身で、奴隸のようになり、けがらわしい境遇にいます。思いきって首を上げ眉を伸べ、事の是非を論じようと思いますが、それをすれば、朝廷を軽んじ、役人をあなどる結果になるでしょう。ああ、ほんとに、私のような人間が何を言うことができましょうか。何も言うことはできません。

物事の本来は簡単にはわかりません。私は若くして高遠な材質をもたず、年をとっても村里で評判はよくありませんでした。幸いに天子は父のゆえに、史官としてのつたない技で私が宮中に入りすることを許してくれました。「お盆かぶれば、天見えず」といいます。つまり一時にふたつの事をなすことはできません。どれかひとつを選ぶのです。であるなら私の場合は、社交を絶ち、家業を捨て¹⁾、昼も夜も一心に公務に精励し、天子の気持ちに添うほかありません。しかし事態は反対の方向に進んでしまいました。

- 1) 忘室家之業。彼にとって「室家之業」は史官たることではないか。それをしないというのはおかしい。ともあれ、私を捨てて、公に奉ずることであろう。

私と李陵¹⁾はともに宮中で侍従の職にいました。しかしとくに親しい間柄ではありませんでした。行動する方向が違っており、一緒に酒を飲んだり共に楽しんだりすることはなかったのです。しかし彼の人となりを見るに、普通の人間とは違っていました。すなわち親に仕えては孝行をし、仲間との付き合いでは信頼がありました。財物に対しては清廉、与えられるものを取る義理を知っていました²⁾。身分の違いをわきまえて譲ることを知り、慎み深くして人を先に立てるのです。いつ

も努力し、自分を顧みずに国家の大事に力を尽くすのは、彼がつねに思っていることでした。彼には国士の風格があると私は思います。いいですか、臣下たるもの、万の死に一の生しかない危険な計画を立て、国家の難事たる戦争に出たことは、きわめて奇特なことです。ところが一度彼が失敗すると、国内にいて安全で家庭生活を楽しんでいる臣下たちが、ただちに彼の欠点を責めていること、私としてはまことに心の傷むことです。

- 1) 司馬遷が武帝のおとがめを受けるきっかけとなった李陵問題の叙述が始まる。
- 2) 「取予義」予えらるるを取るに義あり。前出。

李陵は5000足らずの歩兵¹⁾を率いて、敵国匈奴の地へ進み、王の本拠に足を踏みいれ餌を虎の口もとに出すように勇敢に強敵に戦いをいどみ、優勢な敵軍²⁾と対戦し、单于³⁾と連戦すること10日余、敵の死者が味方のそれより多かったです。戦場では、死傷者を味方の陣地へ連れて帰るもの⁴⁾ですが、匈奴側はそれができず、毛や皮の服を着た族長はみな恐れおののきました。そこで单于是側近たる左賢王・右賢王を援軍として呼び、弓兵らを総動員し、全国の力を挙げて李陵の部隊を包囲しました。双方は戦いながら千里も移動しました。李陵の軍は、戦うにも矢が尽き、退くに道なく、援軍は来らず、将兵に死傷が続出しました。それでも隊長李陵が声をかけて兵士をねぎらうと、みんな感激して立ち上がり、涙を流し、血で顔を洗い、また涙を飲み、めいめい矢のない弓を引きしぼり、敵の白刃に立ち向かい、敵の方角、北に向かって戦死しないものはありませんでした。

- 1) 李陵の兵数は5000、少数の幹部が騎馬であるのを除き、他は歩兵。無事帰国した者、400という。前99年の出来事。
- 2) 「億万之師」匈奴の兵力は、漢書司馬遷伝によれば、单于の直率3万、援軍8万余。
- 3) ゼンウ、匈奴族長の称号。
- 4) 史記匈奴伝にいう「戦いて死者を扶輿する者は、尽く死者の家財を得」と。

李陵がまだ生きて戦っていた時、使いの兵が帰国して戦況を報告しました¹⁾。漢の公卿・王侯たちは祝杯を挙げて、武帝にお祝いを申し上げました。ところが数日たつと、李陵の敗戦の知らせが届き、天子に上聞しました。その後、天子は食事をしてもおいしくなく、政治の報告を受けても喜ばなくなりました。大臣たちはこわくなって、なす術を知りませんでした。君主が落胆心痛しているのを見て、私は卑しい身分をも顧みず、心をこめてお慰めしようと思いました。ほんとうに李陵は仲間とともに、おいしい食べ物を避け、少ない物を分け合い、そのため人は彼のために死にもの狂いで尽くしました。この点、昔の名将たちに劣りません。今、彼は敗れて匈奴の捕虜となりましたが、彼の気持ちとしては、何かの方法で敗戦の罪を償おうとしているでしょう。どうすることもできずに敵に降ることになりましたが、彼が一時期、匈奴の大軍を撃破した戦功も、天下に知らせるべきです。私はこのようなことを言うつもりでしたが、手段がなく、たまたま天子からお召しとご下問がありましたので、このことを話して、李陵の手柄を教え、お心を安らかにしてあげ、臣下の厳しい李陵批判を防ごうとしたのです。

- 1) 李陵は敗戦より前に、陳歩楽という者を都へ使者として送った。武帝は彼の報告を聞いて喜び、その位を上げて郎とした。しかしながら李陵が降伏したということを聞くと、大いに怒って、歩楽を責め、自殺に追い込んだ。

しかしまだ十分に自分の意見を表明できないでいるうちに、聡明な君主は私の意図を理解してくれず、私が貳師將軍¹⁾にケチをつけて、李陵に有利なように宣伝するものと見なして、私を法務長官²⁾に付しました。心からの忠誠も申し述べることができず、天子をあざむいたとする役人の判決に従うことになりました。我が家が貧しいものですから、罪をお金で免除してもらうことができませんでした³⁾。友人も救ってくれず、天子の側近の人たちも私のためには何も言ってくれませんでした。私の体は木や石ではありませんから、痛いこと・苦しいことは身に沁みました。監獄の奥深く閉じ込められ、つきあう相手は法を守る役人だけでした。私の本当の気持ちを話す相手はありませんでした。このことは今獄中にいる少卿さまはおわかりでしょう。私がしてきたことはまさにこのようなことなのです。李陵は名誉の戦死をすることなく、生きて虜囚の辱めを受け、家の名を落としました⁴⁾。そして私は、養蚕室のような所で宮刑を受け⁵⁾、天下の笑いものになりました。悲しいことです。こんな事は一般の人々に詳しく言えるものではありません。

- 1) 貳師將軍、名は李広利、武帝の妻のひとり李夫人の兄である。3万の騎兵を率いて匈奴征伐に向かったが、敗北した。この時に李陵を褒めることは李広利の名をさらに落とすことになる。
- 2) 原語「理」、廷尉、司法を担当する最高の官。
- 3) 漢代には「貨を出す者は罪を除かれる」贖罪の制度があり、死刑に相当する罪も銅50万銭を国庫に納入すれば死を免ぜられた。政府の財政収入の一策である。
- 4) 李陵は匈奴に降ったばかりでなく、漢と戦うために匈奴兵を訓練している、という噂が漢に伝わり、武帝の耳に達すると、彼は李陵の留守家族の皆殺しを命じた。しかしそのころ匈奴にあって兵士の教育に従事していたのは、同じ李姓でも李緒という人であった。彼のせいで家族が殺されたことを知った李陵は、人をやって李緒を殺させた。
- 5) 前98年。

私の先祖は天子から領地や特権を受けるほどの功績はありません。記録・天文・暦を扱うのが代々の職務で、それは占い師に似て、君主からはからかわれるもの、また芸人のように養われるもので、一般人に軽蔑される仕事です。もし私が法に触れて罰せられても、世間からみれば九牛の一毛のようにとるに足らぬ存在で、無数にいる蟻と何の違いがありましょくか。世間は私のことを、理想のために死ぬことをしない人間とみなし、また知恵がなくなり、罪が大きくなったら、逃がられないでくたばる人だと、思っています。

人間にはだれでも死があります。ある死は泰山より重く、またある死は鴻毛よりも軽いです。その違いは死にかたにあります。

死の上等なのは、何かを辱めないことです。その対象により順番ができます：

- 1 祖先を辱めない。

- 2 自分の身体を…
- 3 自分の体面を…
- 4 自分の言葉を…

下等な死は、辱めを受けることです。受け方により順番が決まります：

- 1 縛られる。
- 2 普通と異なる服を着せられる。
- 3 手足に枷をはめられ、棒や笞で叩かれる。

(以上は身体への影響がない。以下は身体が傷つけられる)

- 4 毛や髪を剃られ、鉄の枷をつけられる。
- 5 肌を傷つけられ、手足を切られる。
- 6 腐刑、つまり生殖器を切り落とされる。これが最低。私の恥辱はこれです。

古伝に「刑は大夫に上さず」とあります¹⁾。その意味は、支配階層たるものは節義を守るために自発的に努力すべきである、ということです。動物の場合を考えてみましょう。猛虎は山中にいれば、他の獣はみな恐れます。しかし捕えられて檻に入れられると、みじめにも尻尾を振って餌を求めます。それは実力で拘束されるからです。人間はどうでしょうか。例えば地面に線を引いて、これが牢屋だと言っても、人を投獄することはできません。また獄吏の人形を作っても、それを相手にすることはできません。つまりちっともこわくないのです。しかしそんな刑罰の体裁だけでも、支配階層の人は有罪なら判決前に自殺して自分の始末をつけます。

1) 礼記、曲礼上「刑不上大夫」

さて人間の場合、手足を板や縄で縛られ、裸で笞打ちされて、獄舎に閉じ込められるような時、獄吏を見ると頭を地にすりつけ、牢番を見るとこわがってあえぐものです。これも実力で拘束されているからなのです。ここまで追い込まれながら、なお恥ずかしくないと言う者は厚顔の人で、尊敬できません。例を挙げましょう。[] は史記の関連箇所

周、文王＝姫昌は西方の覇者であったが、殷の紂王により投獄された。[殷本紀]

秦、始皇帝の丞相＝李斯は五刑（入れ墨、鼻そぎ、足切り、笞打ち、さらし）をみな受けた。[李斯列伝]

以下、漢代

淮陰侯＝韓信は高祖により陳で捕らえられた。[淮陰侯列伝]

彭越は梁王、張敖は父張耳を継ぎ趙王となり、王の一人称代名詞“孤”を用いたが、獄に繋がれて罪に当てられた。[彭越列伝、張耳列伝]

絳侯＝周勃は呂后一族を滅ぼし、権力は春秋の五覇をしのいだが、逮捕された（のち釈放された）。

〔絳侯周勃世家〕

魏其侯＝竇嬰は大将軍でありながら赤い囚人服を着て、首枷・手枷・足枷をはめられた。〔魏其武安侯列伝〕

季布は將軍であつたが、首枷つきで、魯の朱家の奴隸として売られた。〔季布列伝、游俠列伝の朱家〕

灌夫は將軍であつたが、逮捕拘禁された。〔魏其・武安侯列伝〕

この人たちは身分は王侯将相まで上り、名声は隣国にまで聞こえていました。それでも罪をこうむり法を加えられた時、自殺することができず、塵埃の中に落ちました。このようなことは昔も今も同じです。辱めを受けないことがどうしてできるでしょうか。この点で言う「勇氣と卑怯は勢いであり、強いと弱いは形である」¹⁾ というのは明らかなことで、疑う余地はありません。もし法律による判決の前に自殺して決着をつけることができず、ぐずぐずしているうちに笞打ちを受け、それから節義を守ろうとしても間に合わないのです。先に言いましたこと、昔は「刑を大夫に施さなかった」理由はまさにここにあるのです。

- 1) 孫子、勢篇「乱生於治、怯生於勇、弱生於彊。治乱数也、勇怯勢也、彊弱形也」勇敢か臆病かは戦いの勢いの、強いと弱いは軍の態勢の、問題である。

さて人情として、生きることを求め、死ぬことを憎みます。また父母を思い、妻子を顧みない人はありません。しかし義理に感激する人は、そうではありません。今、私は不幸にして早く父母を失い、血を分けた兄弟もなく、独身孤立です。少卿さま、妻子に対する私の態度をご存知でしょう。つまり家族恋しきで自殺しないのではありません。勇氣ある者でも必ずしも節義に命を投げ出すとは限りませんし、卑怯者が節義を求めて努力することがあります。私は卑怯な人間で、とにかく生きていたいと願っていますが、それでも身の処し方は知っているつもりです。下男・下女でも死を選んで身の決着をつけることがあります。まして私はなすべきことをなすつもりです。ただ我慢してともかく生き、汚い所に閉じ込められてもこの世に留まるわけは、言い残したことが心の中にあり、死後に私の著作が伝わらないことを残念に思うからなのです。

昔から富貴でありながら名前が残らない人は沢山あります。ただ奔放で・尋常でない人だけが伝えられます。例えば：¹⁾

文王は紂王によって幽囚の身とされて易経を書いた。

孔子は陳・蔡で厄に遭い、春秋を作った。

楚の屈原は頃襄王によって放逐されて、離騷（楚辭に収める）を作った。

左丘明は失明して国語を作った。

孫子は足切りの刑を受けてから兵法書＝孫子を書いた。

呂不韋は蜀に移住させられたが、呂氏春秋を残した。

韓非子は秦で投獄されたが、説難・孤憤（彼の著書の篇）を書いた。

詩経の作品300篇は、聖人・賢者が憤慨を発散させるために作ったものである²⁾。

- 1) イル・ハン朝時代、宰相ジュワイニーは弾圧により病死したが、『世界征服者の歴史』を書き、宰相ラシード・アル・ディーンは死刑となったが、『集史』を残した。漢字表記は、伊利汗国、志費尼『世界征服者史』、拉施特『史集』。
- 2) この箇所、文王から詩経までの叙述は、史記太史公自序にもある。

これらの人々はみな心が鬱屈して、はけ口がないから、書物を著して、過去を述べ未来を考えたのです。左丘明は視力を失い、孫子は両足を切られて、まともに働けなくなったので、引退して著述に努め、文章によって自分の不満を表出したのです。私はなまいきにも、粗末な言辞に頼って、天下で散失した言い伝えを集め、過去の人々の行為と事件を調べ、栄枯盛衰のことわりを考察しました。時代として、古くは黄帝¹⁾に始まり、現在に及びます。表・本紀・書・世家・列伝、合計130篇です。そこにおいて私は天と人、昔と今のことを考え、独自の見解を出そうとしました。

- 1) 五帝のひとり、姓は公孫、名は軒轅。原文はこの名で示す。

しかし草稿ができて上がらないうちに、私は刑罰を受けました。この歴史書が完成しないことだけが残念で、宮刑のことはかまいません。私がもしこの書物を仕上げて、名高い山の穴にでも蔵し、都市や農村のしかるべき人々に伝えることができるなら、蒙った恥をすすぐことになります。もしそうならば、私は一万回死刑になっても悔いはありません。しかしこのようなことは、あなたのような智者に言うだけで、俗物に言ってもむだなことです。私は刑罰を受けた身ですから、世の中で居心地が悪く、くだらぬ者どもが悪口を言っています。私は舌禍によりこんな目に遭い、また郷里の人たちに笑われ、先祖を汚辱しましたから、何の面目あって先祖代々のお墓に参ることができましょうか。今後百代たっても、この恥は消えるどころか、ひどくなるだけでしょう。このような次第で、私の腸は日に九回もねじれる思いです。家にいますと、何かを無くしたみたいに呆然となり、外へ出れば、どこへ行けばよいやらわからない有様です。この恥を思うたびに、汗が背中を流れてシャツを濡らします。私の身分は宮中に奉仕する宦官ですから、隠居して山中に隠れることはできません。だから私も世間の風潮に従って浮き沈みし、時代とともに上や下を向き、世の狂い・惑いと歩調を合わせることにします。

さて、少卿さま、あなたは賢者・名士を推薦するよう、私に教えて下さいました¹⁾。しかしそのことは私の本心と合いません。その言い訳として美辞麗句を並べてもむだで、人に信じてもらえず、恥の上塗りになるだけです。人間は死んだ後でその評価が決まるものです。「書は意を尽くす能わず」²⁾ といいます。手紙では私の思いを十分に表すことができませんが、以上、愚見を申し述べました。謹んで再拝します。

- 1) この文、冒頭部に出た。
- 2) 易経、繫辞上「子曰、書不尽言、言不尽意」孔子の言葉：書き言葉は言いたいことを述べ尽くすことはできない。しゃべり言葉は心に思うことを言い尽くすことはできない。「この句は中国人のいたくこのむところとなり、書簡の終わりなどに慣用句としてよく引かれる」本田濟『易』下（朝日新聞社、中国古典選2）。また吉川幸次郎『中国散文論』12頁、同全集、巻2-11頁。

II 素朴と文明——匈奴と漢

1 匈奴族の文化

史記匈奴列伝を理解するにあたって、次のことを頭に入れておくのがよいと思う。

参考文献

- 江上波夫 1 『ユウラシア古代北方文化』1948年
2 『騎馬民族国家』（中公新書）

地域別：一、二、三のそれぞれに、1 職業、2 民族名、3 体質、4 文化。

第一 モンゴリアの砂漠・草原

- 1 遊牧 2 匈奴
- 3 円形の顔、高い頬骨、低い鼻、小さい目、短い顎、短身、頑丈な骨格など。
- 4 スキタイ族から騎馬術、騎馬用道具・武器を学ぶ、「被髪左衽」（論語憲問）。
道具：動物文様をもち、持ち運びできるもの。
論語の句：さんばら髪、左前の着物

第二 中間地帯

- 1 農業・牧畜 2 山戎、ケンイン、クンイクなど
- 3 細面、大きな目、高い鼻、長身、華奢な造り。
- 4 一に同じ

第三 黄河流域平野

- 1 農業 2 漢人
- 3 二に同じ
- 4 都市、国家、文字、冠帯（役人は髪を梳いて冠をかぶり、官位を示す帯飾りをつける）、着物は右前に合わせる。

注目すべきは、一と二の文化が同じ、二と三の体質が同じ、ということである。二と三の違いが人種でなく文化にあることに、中央アジア史について「タジク人とトルコ人の差は、人種でなく文化にある」というドーソン『モンゴル帝国史』の卓見が適用できる。佐口透訳、1-190。

また忘れがちなことは、この中、三の国家だけが文献をもっており、内容が農耕民・都市民の立場から作文されていることである。周、秦、趙、燕など、もとは第二地帯の出身であるが文献はその出身を隠そうとする。例えば周の祖先は稷とある。ショクはキビであるから、周は最初から農耕民であったという説も成り立つけれども、単純にすぎる。内藤湖南『支那上古史』は、周の記録上の王として、第6代に皇僕、10代に高圉、11代に亜圉の名が見え、それらの名は牧畜に関係あるとする（僕は馬が引く車の御者、圉は馬を養う人の意）。これらの人々が周の本当の先祖である。しかしこれではまずいから、あとでその上に農耕関係の人物を追加し、農耕王と牧畜王をつなぐために、第2代の不窟という王が「農業をやめた」ことにした、と説明する。全集、巻10-73～4頁

桑原隲藏『東洋史教授資料』の冒頭、1「漢族の起源」において、今日、支那本部を占領せる漢族は、外来人種にして、しかも西北の方面より支那に移住し来り、まず黄河沿岸に蕃殖し、次第に南進して、ついに今日の状態を呈するに至りしことは、疑うべからざる事実なり、と。そしてドイツの地理学者リヒトホーフェンの『支那』に見える見解に賛成し、太古、ペルシアに文化を伝えたアーリア族、インドに文化を伝えたアーリア族、そして東方、支那方面に文化を伝えた漢族は、ひとしく中央アジアに棲息していたと信ずる、と言う。全集、巻4-321～2頁。漢民族とアーリア族の原住地が近かったということは、江上のいう、第二・三地域の体質の類似の説を支えるものとなる。

宮崎市定『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』1940年（『アジア史論考』上、全集、巻2）の書名は、東アジア史の特色を表現している。前者は北方民族、後者は漢民族の、民族精神と集団構成（血縁／地縁）を示す。その緒言から、双方を対照させれば：

北：素朴人……行動 意志的 直截簡明 男性的 全体統制主義

南：文明人……思索 理智的 情緒纏綿 女性的 個人自由主義

文書の題名がとくに重要である。歴史学界は牧畜・遊牧の民を「野蛮・未開」と軽蔑するのを当然と考えているのに反し、ここでは文明主義に対する素朴主義の語を用いていることである。この種類の民のエトスをプラスに評価する功績は記憶さるべきである。本書にいう、周王室に伝えられる伝説によれば、古公亶父〔文王の祖父〕の時まで、夷狄の俗であって、遊牧生活を送っていた、と。また「五覇はみな夷狄なるの考」において、齊は東夷、楚は南蛮、晋は北狄、呉と越はまた南蛮であって、周と魯を助けて漢文化の形成に貢献した、との説を立てる。また「素朴民族としての秦」の見出しの下に、その未開なりし点が秦の有する最大の強みであった、とある。確かに、秦による統一は、その荒っぽさにおいて遊牧的であり、決して農民的ではない。また「西方文明の影響」の項では、春秋時代までの戦術が戦車——馬4頭が引き、人間3人乗り——によったのが、戦国にはいると、西方から伝えられていた“胡服騎射”を趙の武靈王が北方民から採用したことを述べる。これも江上説と一致する。戦国時代になって兵数がふえ、車が足らず、多くの歩兵と僅かな騎兵と

いうのが、中国軍隊の構成となっていた。李陵の部隊がその例である。

国家建設は殷代に認められる。それを示すのは王墓と呼ばれる遺跡で、何百人にも及ぶ殉葬者、多種多数の副葬品から、権力の大きさがうかがえる。また中国文化の建設者は、紂王を討って殷を倒した周の武王の弟、周公とされている。論語に孔子が彼を慕って「久しいかな、吾また夢に周公を見ず」と（述而）、また周の文化をたたえて「郁々乎として文なるかな、吾は周に従わん」とある（八佾）。

また古代中国には姓と氏の別があった。姓は遊牧・牧畜集団の部族に、氏は農耕集団の家族に、それぞれ当たる。のちに姓＝部族の名がなくなったのは、集団の単位が農耕民の家族（1家約5人）を基準にするようになったからであろう。

東アジアの歴史は、漢人の増加・進出、つまり第三地帯の拡大の歴史であるといえる。ある時点での実例を示すのが、今西錦司『草原行』1947年で、39年の調査において張家口から真北へ進む道筋での観察である。全集、巻2-33～180頁、とくに125～6頁。

モンゴル人地帯……土地利用の意欲・打算がない

無住地帯

漢人地帯……土地に対する執着が強い

モンゴル人が無住地帯から北に退いたのは、漢人土匪が出たからだと言うが、彼らはそこへは戻ろうとはしない。漢人がそこへ進出して来た。そのことを今西は「漢人が進出したからモンゴル人が退いたのでなく、モンゴル人が退いたから漢人が進出した」と説明する。その結果、現在、内蒙古自治区の人口の8割が漢人となっている。また清朝以来、満州への漢人の移住も著しい現象である。

もうひとつ江上の説を引いておく。匈奴族の時代区分である。

- 1 勃興・全盛期 文献に現れる最初から、軍臣单于まで
- 2 漢の優勢期 武帝時代、衛青・霍去病による討伐 前134年～
- 3 小康時代 匈奴の東西分裂、宣帝と呼韓邪单于の同盟 前53年～
- 4 衰退期 南北に分裂、南匈奴は後漢に帰服 後48年～

前134年…武帝期、軍臣单于を馬邑の市場へ招いて暗殺しようとして失敗し、以後、漢は正面きった攻勢に転ずる。

前53…後述。

後48…後漢光武帝朝、呼韓邪单于の孫＝比が南匈奴单于となり、漢と和睦した祖父の称号を襲ぐ。北匈奴と対立。五胡の1、十六国の3を占めた。439年、北魏による華北統一で終わり。

以下に史記匈奴列伝についての覚え書を記す。参考文献は次の2点である。

内田吟風・田村実造ほか訳注『騎馬民族史』1，東洋文庫，の中の内田訳注，史記・漢書匈奴伝
小川環樹・今鷹真・福島吉彦『史記列伝』4，岩波文庫

匈奴族は北辺にいて，草のある所を求め，家畜を放牧しつつ移動する。主な家畜は馬，牛，羊であり，珍しいものとして駱駝，驢，騾，ケッテイ，トウト，テンケイがある。

騾（らば）—おす驢馬とめす馬の子

ケッテイ 西方産のアーリア馬（以下の3種については江上1による）

トウト モンゴリア産の野生馬

テンケイ モンゴリア産の野生驢

上述の主な家畜の基本的用途：馬は人が乗る，牛は馬を引く，羊は食用。駱駝からの3種はいずれも荷物の運搬用。

現代のモンゴリアでは，馬，牛，羊，山羊，駱駝の5種を mal（家畜）と呼ぶ。乳はこのすべてから搾る。梅棹忠夫『回想のモンゴル』（中公文庫，著作集2—192～196）。mal が「家畜，財産」を意味することは，アラビア，ペルシア，トルコ，バシュトーの諸語に共通である。

肉は主に羊，時に牛のも食べる。秋の終わるか冬の始めに殺し，少しずつ切って食う。冷蔵庫のない生活である。これは西アジアでも同様に，筆者のアフガニスタン国ビアルヘル村での聞き取り，1970年。

水と草を追って移動する。城郭や定まった住居はなく，耕作もしない。しかし分地（家畜を放牧する縄張り）はある。

文書（書きことば）はなく，言語（しゃべりことば）だけで取り決めをする。

児（10歳以下）は羊に乗る（遊び），弓を引いて鳥や鼠を射る（これも遊び）。

少し成長すると（10歳代）狐や兎を射て，その肉を食用とする（肉体的に成長して経済活動ができる）。

士（20歳以上）は弓を引くことができ，すべて鎧兜を身につける（精神的にも充実して軍事活動ができる）。

匈奴人の成長段階ごとの職務をよく表現している。

牧畜・狩猟は平時も戦時も共通の技術である。

食料は家畜の肉，衣料と寝具は動物の皮や毛から作る。

若さと健康を尊び、老いと病弱をいやしむ。壮者がよい物を、老者は残り物を食べる。

老人を尊敬する中国道德と異なる。

男性の父や兄弟が死んでその妻が残された場合、彼はそれをめとる。

嫂婚制 *levirate* で、中国では近親結婚として排斥される。

名（生まれた時につけられた名）があり、それで人を呼ぶのは中国の習慣では失礼になるが（字で呼ぶ）、匈奴族では差し支えない。姓（家族名）や字はない（部族名はある）。

字、あざな、20歳で成人してつける社会人としての名前。名を避けないのはアーリア的習慣か、現在の西アジアからヨーロッパにかけて一様である。

一〜三地域に共通の数の習慣は、十、百、千、万という整然たる十進法の単位をもっていたことである。西方では百と千しかなく、4、12、20なども単位となる。

秦、始皇帝の時になって匈奴族は突如としてすばらしい文学を生んだ。これは司馬遷の創作ではなく、同族の間に伝わっていたものであろう。文字がなくてもすぐれた文学がありうることの証明となる。以下に紹介する。

2 冒頓登場の伝説

この時、匈奴族の東方では東胡が強く、西では月氏族が盛んであった。匈奴の単于、名を頭曼という。彼は秦と戦って勝てず北方に退いた。単于の長子で後継者を冒頓という。後で単于は冒頓の生母以外の閼氏を愛するようになり、それが産んだ末子を後継者としようとした。そこで冒頓が邪魔になり、月氏へ人質として送った。その後で頭曼単于は急に月氏を攻めた。人質たる冒頓を月氏が殺すことを期待してである。月氏は果たして冒頓を殺そうとした。しかし冒頓は月氏の良馬を盗んでこれに乗り、脱出して帰国した。頭曼はあてがはずれて失望したが、平気な顔をして冒頓の勇気を褒め、一万の騎兵隊の長に任じた。冒頓は父の意図を知っているから、復讐を企てる。

単于の姓は孛鞞，その妻の称号は閼氏，エンシ。

冒頓はそこでかぶら矢を作り、部下に騎馬射撃を訓練させた。命令「かぶら矢がねらうものを射ない者は、すべて斬る」と。鳥獣の狩りに出てそれを実行した。即ちかぶら矢が射るものを射ない者は、直ちに斬った。次に冒頓は自らの良馬を射た。主人の愛馬のこととてためらって射ない部下を、たちどころに斬った。しばらくして、今度はかぶら矢で自分の愛妻を射た。部下は大変恐れて射ることができないと、冒頓はこれもまた斬った。そののち冒頓は狩りに出てかぶら矢で父単于の良馬を射た。左右の者もそれを射た。ここにおいて冒頓は部下が信頼に値いすることを知った。ある日、父に従って狩猟に出た時、かぶら矢で単于そのものを射た。部下もまたかぶら矢の示すとお

り、頭曼単于を射殺した。それから冒頓は継母やその子、および大臣で言うことを聞かない者を、すべて殺し、自ら単于の位についた。

耳で聞いて理解できる表現である。「冒頓をして月氏に質たらしむ。冒頓すでに月氏に質たれば、頭曼は急に月氏を撃つ。月氏、冒頓を殺さんと欲す。冒頓、その善馬を盗み……」と、前の文の終わりを受けて次の文が始まるので、わかりやすい。また射る対象を自分の馬・妻、単于の馬と上げていき、最後に単于自身を射るという、緊迫した行動と明快な描写は、まさに素朴民族のものである。

かぶら矢、矢の先に木、竹または角（つの）で中空の蕪形を作り、飛ぶ時に音を発する。原語は「鳴鐃」。江上 2 にいう「匈奴の独創になるかと思われる矢鏃は鳴鐃で、それは広野での戦闘でまっさきに射られて、攻撃目標の信号に用いられた」と。76頁。

冒頓が単于になった時、東胡が強盛であった。冒頓が父を殺して自立したと聞いて、使いを送り、冒頓に言わせた「頭曼が在世中にもっていた千里馬を欲しい」と。冒頓は部下たちに相談した。部下はみな言った「千里馬は匈奴族の宝のような馬です。与えてはなりません」と。冒頓は「よその国と隣り合わせでいながら、どうして一頭の馬を惜しむか」と言い、千里馬を与えた。しばらくたって、東胡は冒頓が恐れていると思い、また使者をやって、閼氏のひとりを欲しいと言わせた。冒頓はまた左右の者に問うた。彼らはみな怒って言った「単于の妻を要求するとは、東胡は無道だ。攻撃しましょう」と。冒頓は「よその国と隣り合わせでいながら、どうして女ひとりを惜しむか」と言い、愛する妻を東胡に与えた。

東胡はいよいよ驕慢となり、西、匈奴の方へ侵入して来た。匈奴と東胡の間に棄て地があり、千里余り、だれも住んでいない。両国はその土地の両端に“甌脱”を作っていた。東胡の使いが来て、冒頓に言った「匈奴と我が国の間の甌脱の外の棄て地は、匈奴人が入ってこられない土地であるから、そこは我々が所有したい」と。冒頓は群臣に問うた。群臣は答えた「これは棄て地ですから、与えてもよいし、与えなくてもよろしい」と。その時、冒頓単于は大いに怒って言った「土地は国家の根本である。どうしてそれを与えようか。」土地を与えよと言った者をみな斬った。

冒頓は馬に飛び乗り、「ついて来い、遅れる者は斬るぞ」と国中に命令して、東に向かって東胡を襲撃した。東胡としては始めから冒頓を軽く見ていたので、備えをしていなかった。冒頓が兵を率いてやって来、東胡を撃って大いに破り、東胡王を殺し、その国民と家畜を奪った。

今回もまず妻を与えて油断させた。遊牧民は土地に執着しないという常識を、冒頓は否定することによって、敵も味方もあざむいて、奇襲に成功する。これも鮮やかな作戦である。

3 南北の人的交流

漢と匈奴の平和的關係はどうであったか。文帝の時代、前176年、匈奴単于から漢皇帝に書簡が来た。匈奴側の漢人が書いた漢文であろう。それによると、匈奴は月氏を滅ぼし楼蘭・烏孫・呼揭など26国を支配下に入れたとある。北方諸民族が匈奴族の下にまとまった勢力をなしていたことが知られる。漢からも返事を出し、単于のために上等の布地・衣服・装飾品を贈った。

冒頓の死後、その子、稽粥が立ち、老上単于と称した。文帝は王室の女性を単于に妻として与え、宦官の中行説（チュウコウ・エツ）をおもり役として匈奴に遣わした。彼は匈奴に入るや、素朴主義者となり、単于が漢の衣食を愛好するのをいましめた。曰く：匈奴の人口が漢と比べて遙かに少ない割りに強いのは、衣食を漢に依存せず、自給できるからである。単于が伝統的なものを捨て、漢の物を好むなら、匈奴精神は漢に奴隷することになる。漢の絹や綿の服を着て草や茨の中を通れば、ぼろぼろに破れる。匈奴本来の皮と毛の着物がまさることを国民に示すべきである。食料も漢の米や麴でなく、乳と乳製品の美味なるを認めるべきである、と。

中行説の率直な助言に対して単于が腹を立てず、罰しなかったのは、支配者の健全な倫理を示す。

彼はまた漢から来た使者と、双方の文化を論ずる。匈奴文化に対する漢の使者の批判は次のようである。

- 1 老を賤しむ。
- 2 父と子が穹廬の中でひとつの部屋に寝る。
- 3 父が死ぬとその後母（生母以外）をめとり、兄弟の死にはその妻をめとる。
- 4 冠帯の飾り、宮廷の儀礼がない。

これに対する中行説の反論：

- 1 若い者がよいものを食べて戦争に参加することにより、老人は安心できる。
- 2 「君臣簡易、一国之政、猶一身也」
- 3 嫂婚制「種姓の失われるを憎むなり」（夫を失った女性を保護するため。イスラム教の一夫多妻制も同じ）。この習慣のない漢の親属の方が平和的か？
- 4 「冠固何当」冠もとより何にか当たらん。冠など役に立たない。

最後に彼は「ああ、土室之人（土製の固定家屋に住む漢人）よ、冠をかぶり、べらべらがやがや言うことが、何の役に立つか」と結ぶ。文明主義への批判である。これを記録した司馬遷も同じ意見であったのかもしれない。

中行説のほかにも、漢から匈奴に移った者がいる。韓王信・陳豨・盧綰らは高祖と対立して、匈奴に降った。史記にはこの3人をまとめて列伝三十三とし、やはり高祖と対立することになったいわゆる韓信こと淮陰侯の列伝三十二に続いている。みな高祖の猜疑心の犠牲者である。3人は匈奴と通じていると高祖に疑われ、それは死刑につながるから、匈奴へ逃げたのである。司馬遷は韓信

盧綰列伝の“太史公曰”でいう「内ではその強大さのゆえに漢帝から疑惑をもたれ、外は匈奴を頼って援助を求め、そのため日々に漢と不和になり、自らを危険に追込み、よい知恵も浮かばず、結局は匈奴へ逃げ込んだ。哀れではないか。」

ただし“太史公曰”は本文と同じでなく、“たてまえ”を言う場でもあり、ここはそうである。淮陰侯（韓信）列伝も同様で、本文で熱烈に主人公を礼賛した後、太史公曰で「もし韓信が、道理を学び、謙虚で、自分の功績を誇らず、その才能を鼻にかけなかったなら、理想的な人となれたであろう」とこきおろす。漢王朝への気兼ねであろうか。

仲間割れから敵に投ずるのはお互いさまで、武帝の前121年、匈奴の渾邪王が4万余人をつれて漢に降った。漢との戦いに敗れたことを、老上单于の子、軍臣单于に責められ、処刑されそうになったからである。

女性の場合、南から北へ行った例はあるが、その逆はなさそうである。武帝は対匈奴同盟のために、遠縁の娘、名は細君を烏孫族長に嫁入りさせた。彼女は慣れない環境にあって嘆きの詩を作り「願為黄鵠兮帰故郷」と言った。夫の死後、北族の習慣どおり、その孫から求婚されたが、彼女は中国の風習を守って受けず、帝に訴えた。しかし帝は「其の国の俗に従え。烏孫と共に胡〔匈奴〕を滅ぼさんと欲す」とさとした。彼女はそれに従った。一女をもうけて彼女が死ぬと、漢は別の王女を与えた。漢書西域伝、烏孫国の条。

前漢の末、元帝の世に、後宮にいる良家の娘、王牆、字は昭君を、呼韓邪单于に嫁がせた。彼女は夫の死後、彼の先妻の子、復株累单于の妻とされた。この際、彼女は成帝（次の皇帝）に上書して帰国を願ったが、帝は武帝同様、「胡俗に従う」よう勅した。漢書匈奴伝、後漢書南匈奴伝。彼女は後に文学上悲劇の主人公に仕立てられる。

唐、李白「王昭君二首」の其の二（五言絶句） 今日漢宮人，明朝胡地妾

李白は文明主義だけの立場に立つ。その方が世間に受ける。

宋、王安石「明妃〔王昭君〕曲二首」（七言古詩）

君不見咫尺長門閉阿嬌，人生失意無南北（其の一）

漢恩自淺胡自深，人生樂在相知心（其の二）

阿嬌は武帝の最初の皇后陳氏、廃せられ衛皇后に代わられた。武帝の家庭生活は現代人の感覚からは極めて不幸であった。王安石は人類の平等を信じていたが、それを理解する人は少ない。とくに中国人はそうである。

4 文明社会の実態

匈奴に対する漢の優位期は武帝の治世である。対匈奴戦の英雄は帝の妻の縁者である。大將軍＝衛青は武帝の2番目の皇后＝衛子夫の弟であり、驃騎將軍＝霍去病は衛青の姉＝少兒の子である。このふたりと、もうひとり、華々しい軍功のなかった貳師將軍＝李広利（帝の愛人李夫人の兄）を

加えて、清、趙翼『二十二史劄記』巻2「武帝三大将皆由女寵」の項で、帝が自分の妻たちの縁者をひいきして取り立て、しかも「みな大功を成し、名将となりたるは、これ理の解すべからざるものなり」という。

前述の2名将を記すのが史記、衛將軍驃騎列伝である。ここにはこの兩人の下にいた將軍をも列挙している。まずその中に匈奴から漢に帰化した者として、公孫賀・趙信のふたりがある。

その他の人の多くは気の毒な最後に終わっている。まず「当斬、贖為庶人」の句がハンを捺したように頻繁に現れる。つまり死刑になるところが、お金を出すことによって死を免れ、ただし今までの地位を失って平民になる、いわば贖罪の制度の適用を受けた人たちである。その名を挙げる。カッコ内は処罰の理由である。

公孫敖（約束の期限に遅れた）、蘇建（敵将を逃がし、部下を失う）、張騫（匈奴に追われた月氏との交渉で知られる。約束の期限に遅れる）、趙食其（道に迷う）。期日に遅れたことで死刑になるのは、秦の始皇帝が陳勝・呉広を反乱に追いやったのと変わらない。高祖劉邦の“法三章”の伝統はどうなったか。

その他、不運な最後を遂げた人：

李蔡「法に坐して死す」、郭昌「印を奪わる」、荀彘「法に坐して死す」、路博徳「法に坐して侯を失う」、趙破奴は匈奴の捕虜となり、のち脱出、反武帝工作で処刑。

まともに一生を終えたい人：

李息、李沮、張次公、曹襄、韓説。このうち張次公は游俠列伝に名前が出、義縦とともにかつては群盜の一味であったという。

匈奴列伝の前に単独で李將軍列伝として与えられている李広（李陵の父）も、道に迷って出会いの約束に遅れたので、自殺した。司馬遷は彼に同情してか「自殺の知らせを聞いて、彼を知る者も知らない者も涙を流した」と書き、また諺「桃李不言，下自成蹊」は彼にこそふさわしいという。

武帝は儒学を尊重したといわれるけれども、漢の世に中国と北方の文化の差は小さく、漢の中でも官と民の差はなかった。呉楚七国の乱を平定するのに、周亜夫は游俠のひとり劇孟の助けを借りて大喜びしたことでもわかる。この時代、支配機構の人間関係はきわめて *persönlich* であった。それが *sachlich* になるのは宋代の官僚制からである。

5 匈奴の衰退

前漢、宣帝の世となった。この人は先に武帝によって自殺させられた戾太子の孫に当たる。このころ匈奴族の勢いは衰え始める。その原因の一は自然災害である。単于は万騎を率いて烏孫を攻め、多くの老人・幼少者を捕えた。しかしその帰途、大雪に遭い、一日で深さ1丈余も積もり、人民・畜産は凍死し、帰りついた者は1/10もないほどであった。前68年のことである。同年、匈奴は饑え、人間と家畜の死んだものが10に6、7といわれる（漢書匈奴伝）。また時代は下るが、紀元後46年、匈奴は連年日照りといなごの害により土地は至るところ赤くなり、草木は尽く枯れ、人・畜は飢え

るか病んで、死耗するもの大半という有様であった（後漢書南匈奴伝）。

梅棹『回想のモンゴル』（著作集2-51～52）に、モンゴルの家畜災害についていう：雪やみぞれが降り、それがかたまると、草がすべて凍りついてしまう。すると家畜は草を食べることができない。家畜のための草のたくわえはあるが、モンゴルでは量は必ずしも多くはない。凍害の時は放牧に出しても家畜は食うものがない。凍害が数日つづくと、バタバタと家畜が死んでゆく。……旱害は稀である。原則として旱魃はない。モンゴルの雨量は年間 200～400 mm で、非常に安定している。また水は地下水を利用するので、いつでもある、と。1944～46年、内蒙古での実態調査にもとづく。

匈奴衰退の第2の原因は、他の北族との対立である。冒頓単于が文帝に出した手紙によれば、同族は他のいくつもの民族の上に立っていたが、前70年ころには、丁令族が北から、烏桓族が東から、烏孫族が西から、攻め来たり、もちろん漢が南から侵入を繰り返していた。漢は今までの経験から、北辺の防備を強化し「漢の辺郡は、烽火（緊急信号としての狼煙一のろし）や候望（監視所）が精明（精密正確）であった」という。

第3は、内部の分裂である。王昭君をめとった呼韓邪単于の時、彼を含めて5人が単于を称した。中でも彼の兄で西方に移った郅支単于が有力で、彼は兄との戦いに敗れた。呼韓邪としては重大な決心に迫られた。漢に降伏するかどうかである。

近臣のひとり単于のために計って降伏を提案した。即ち、入朝して漢に仕え、漢の援助を求めて、はじめて匈奴は安定する、という意見である。単于はこの意見を諸大臣に問うた。このような場合、勇ましい主張が優勢となるのが常である。果たしてみなが降伏に反対した。曰く：不可である。我々匈奴の風俗は、氣力を尊び、服属をいやしむ。馬に乗って戦うことにより国を保ってきた。だからこそ諸民族の間に威名をもっている。戦死は壮士の運命である。いま兄弟で国を争っているが、兄か弟かどちらかが残る。だから誰かが死んでも威名はなくなり、我らの子孫は常に諸国の支配者である。漢が強いといっても、この匈奴を併合できないではないか。どうして古来の制度を乱して漢に臣として仕え、今までの単于たちの名を汚し、諸国の笑いものになってよからうか。このようにして安泰であっても、他族の長となることはできない、と。

先に帰順を提案した臣下が反論した：そうではない。国の強い・弱いは時によるものである。今、漢は全盛で、烏孫など城郭諸国（定着して集落を営む国）はみな漢に臣として仕えている。我々は且鞮侯単于（武帝と同時期）以来、日々に衰えて、回復できない。今より強かった時でも、一日も安心できる日はなかった。今、漢に仕えれば安存するが、仕えなければ危亡する。これ以上の計りごとがあるか、と。

諸大臣は果てしない議論を続けた末、呼韓邪は帰順の決意を固め、自分の子を使いとして宣帝の宮廷に送った。前53年のことである。翌年、単于は漢の宮廷で拝謁し、漢は多種多数の高価な品物を単于に贈った。その後、呼韓邪は漢軍の協力を得て、兄を滅ぼした。彼が元帝から王昭君を賜ったのは、その後で入朝した前33年のことである。中国の経済力に屈服したけれども、南匈奴は存在

を続けることができた。整然たる降伏は困難なものであるが、それをやれたのは彼らの幸運である。

中国への文化的従属を示すものは、後18年(王莽時代)に単于となった者が、称号の中に「ジャクテイ」の語を入れたことである。それは「孝」の匈奴語である。漢の皇帝——高祖を除き——の諡号に孝の字を入れるのを真似したのである。武帝は正式には孝武帝という。親に孝行するのは中国人の最高の徳目である。桑原隲蔵『中国の孝道』(講談社学術文庫、全集、巻3)。

補記

1995年度、大阪外大の授業、世界文化史演習Ⅰ(中央アジア史の諸問題)のテキストとして読んでいる Latimore, Owen, *Inner Asian Frontiers of China*, 1940, 92 の第6章「中央アジアのオアシスと砂漠」の中の“中国と中央アジアの中間地帯としての準オアシス地理 sub-oasis geography”の項に、以下のような記述がある。

中央アジア＝中国領トルキスタンのうち、天山山脈の南側はタクラマカンで、そこには砂漠とオアシスがあり、オアシスでは山の雪解け水を利用した農耕が行われる。砂漠は何にも利用できない。天山の北側はジュンガリアで、ステップとオアシスがあり、それぞれ遊牧と農耕が営まれている。

一方、中国＝黄河弯曲部＝中国古代文明発祥地では、太古から部分的オアシスがあり、農耕と狩猟・牧畜が行われていた。灌漑技術の進歩に伴い、耕地が拡大して連続的となり、農耕が狩猟・牧畜を圧倒した。

この二地域の間にあるのが、準オアシス地帯で、寧夏・甘肅地方がそれである。そこでは自然条件(水不足)のゆえに、耕地の拡大が不可能で、現在もなお、部分的農地の間には粗放農業や牧畜にしか使えない土地がある。

本稿の記述による第二地帯は、ラティモアのいう中間地帯であり、中国は第三地帯に当たる。また「長城の遙か北方に、中国人種と明らかに異なるトルコ族・モンゴル族がいた」と彼がいう地域が、第一地帯である。この住民がモンゴロイドであろう。

ラティモアはまた言う：中国領トルキスタンの主要な住民は、太古から Alpine stock [コーカソイド]であり、準オアシス、さらに中国の住民も同様であった。中国人と「西戎、北狄」の間の人種的差は、あってもごくわずかであった、と。

(1995. 5. 9 受理)